

マッサージ屋のおっさん が怪しい

信州しなの

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

降谷さんが怪しいマツサージ屋に行く話。

- ・オリ主はジジイです
- ・降谷さんをひたすら健康にしたかった
- ・ねこぢる旅行記インド編が原因

※pixivで掲載していたのを持ってきたもので、無断転載ではありません。pixivと投稿者の名前が多少違います、どちらも執筆者・投稿者ともに同一です。

目次

どこから見ても怪しい	1
白さに裏打ちされた怪しさ	7
断じて快樂墮ちではない	15
もつと自由に笑いたい	24
風見はよくわからない先入観を持たれて いる	32
区別されるもの	41
きつと近いうちに	50

どこから見ても怪しい

彼は疲れていた。とても、疲れていたのだ。だからどこか風の噂で聞いたマツサージ店に行ってみようと、普段はしない寄り道をしてしまったのも致し方がなかった。

運動はしている。だけれども、デスクに噛り付いたり容赦のない光を眼球に叩きつけてくるディスプレイを見つめていたり、飛んだり跳ねたり走ったりドンパチしたりして、体が休まるかと言ったらそんなことはない。寝たところで回復しきる前には起きて職務を果たす必要がある。

彼はそう。とても疲れていたのだった。

そこはオフィス街のややはずれにある、古い3階建てのビルだった。確か以前……それもずっと昔は和菓子屋だった気がする。跡継ぎもなく古い店が暖簾を降ろすことは別に珍しいことではなく、ここも例に漏れることなく消えてしまった店の一つだったはずだ。そこに、どこかの輸入品についてきたような何とも言えないフォントで『インド式マツサージ』とだけ書かれた看板が掲げられていた。

「……か」

はちやめちやに効くとは誰の言葉だっただろうか。風見ではないが、誰か部下だった

気がする。その辺の記憶も曖昧になるほど疲れていたし、限界を訴える肩こりはストレッチくらいでは治まってはくれず、鈍い頭痛をもたらしていた。

が、なんといつても適當すぎる看板だし、扉もお洒落さのかけらもない古いくすんだ茶色のアルミサッシ製手動の引き戸だ。壁に至っては塗りなおすのではなく、無理矢理ひび割れにセメントを塗りこんで補修した跡がある。

あからさまな飾らない言葉で……そう、悪くいつてしまえば廃墟手前のぼろいビルだった。

「ごめんください」

料金や時間といった説明が一切掲げられていない不安はあるものの、ガラガラと思つたよりもずっと軽い扉をあければ怪しいインド人が、畳の上に敷いた花柄のバスタオルの隣でワイドショーを見ていた。

痩せ気味で、老人に入ったような風貌で、ヒゲに白髪が混ざっていて。

いかにも日本人が想像するインド人といったような風貌の、あやしい男だ。その人物がこちらに目を向けると、にやりという音が聞こえそうな具合に口をゆがめた。副音声でカモが来たと聞こえてきそうな顔だった。

「アイアムヨーガマスター。横なつてー」

それだけである。一切の説明がない。

「ええと。この、タオルの上でいいんですか？」

「ソダヨ横なれロウドウーシャ」

どうみてもスーパ―の二階とかにある衣料品コーナーの特売で買ってきたようなタオルを指さして横になれと言うインド人に面食らいながらも靴を脱ぎ、踵を揃えて並べてから畳の上のバスタオルの横に立った。枕もホームセンターで叩き売りされていそうな代物だ。これにもタオルがぐるぐると巻いてあった。

物は悪いが、きちんと洗濯してあるのが分かるというのが唯一の救いのように思える。とりあえず仰向けでいいんだろうか。

「あの、仰向けでいいんですか？」

「うつぶせろ下向け」

「アツハイ」

なんだろう、このインド人ものすごく有無を言わせない何かがあるぞ。

何が始めても対処がしややすいようジャケットを枕のすぐ横に置いて、指示されたようにうつぶせに横になる。妙な緊張が走った。

「そ〜〜〜ら、イクヨー」

「んっ!!ぐ、が!」

気の抜ける掛け声が掛かったと思つた瞬間、容赦のないマッサージが始まった。バキンのゴキンの、耳に優しくない音が聞こえる。遠くからはどのゴミ捨て場から拾ってきたんだと言いたくなるような古いラジカセからカレー屋でよく聞くようなBGMが聞こえてくる。そのCDどこで売ってるんだ。インドか。インドで買って持ってきたのか。直輸入だな、と寝ぼけた頭は案外マッサージ音と合うなと考えていた。考えた瞬間、マッサージ音ってなんだ。普通マッサージはこんな物騒すぎる音を立てないぞとぞつとする。

これは、マッサージというより、関節を破壊されている音なのでは……? ?

だが、骨折や関節を外されるような痛みはない。確かに痛みに襲われてはいる。だが、痛気持ちいともいうべきだろうか。とにかく『効いている』感が凄まじい。そう、とても。とてももなく効いているのだ。決して痛みを快感に捉えているわけではない。それだけは断じて違うと言ひ切れる。

「ロウドウーシャみくんなカッチカチ! お客さんもカッチカチ! ロウドウーシャだからカッチカチ! ほーれほぐれる、ほぐれる、労働者あ!」

「あ、ぐ……！」

コイツ絶対に日本語ぺらっぺらだろ。なんでわざわざ怪しすぎるイントネーション挟んでくるんだ。やめろ。笑う。怪しすぎて笑う。

「あーっはっははは！健康なてくー！あーはははははは！」

「く、……っ！」

お前が笑うのか。お前が笑うのかよインド人。

この、笑えるのにマツサージに夢中になるあまり笑うことが出来ず、痛いのに滅茶苦茶に気持ちのいいマツサージは、気が付けば終わりを迎えていた。……からだか、いようちに、かるい。まるで うまれかわったかのような かるさ。

感動を覚えながらボンヤリとする頭のまま肩を回す。張るような感覚も重さも消え失せ、頭痛もない。そう、嘘のように疲れも消えているのだ。あと3年は戦えるような気にさえなってくる。

そんな様子を優しい瞳で見つめる怪しいインド人がまるで聖者のように見えてくる。ああ、ありがとう。あなたは本物の聖者だ。聖者がゆつくりと口をあけた。

「二千円。二千円よっせ」

聖者は価格設定も聖者だった。口調はどう控えめに聞いても恫喝じみていたが。

「あ、はい二千円ですね」

「二千円寄越したらささと帰れ。ほれ二千円だ」

こうして追い立てるようにして二千円を支払ったあと、「良くなっただろ帰れ」と本当に追い立てられて店を出た。

「……また来ます」

「つぎも二千円忘れるな、ロウドウーシヤ！」

おそらく日本語は堪能だろうに相変わらず片言つぽい日本語は継続するようで、今度こそ笑いながらアスファルトを踏みしめた。

今日はちよつといい酒を飲もう。そんなことを考えながら。

白さに裏打ちされた怪しさ

徹夜明けの太陽が黄色く輝いて頭が痛い。身体は骨格を鉛製にしたかのように重く、軽快な足取りとはどういうものだったのかをはるか彼方へと忘却させていた。今日も彼は疲れていた。そう、今日もとても疲れていた。

疲れた時取る行動や取りたい行動は人それぞれだろうが、多くの人は休息を求めている。睡眠、美味しい食事、時間を忘れる長風呂。いずれも疲れを忘れさせ、明日への活力となってくれるものだろう。その中にもう一つ付け加えたいものが出来た。それが、マッサージだ。

正直に言ってしまうとマッサージと侮っていた部分も彼にはあった。血行が良くなることでもたらされる効果は知っていたし、これまでも何度となく世話になったこともある。だがあれは一時的であつたり、逆に毎日しなければ意味がなかつたりと扱いの面倒なものという認識もあり、マッサージの世話になるくらいなら身体を鍛えて疲れを殴り返すくらいに心境でいたのだ。

その降谷の心境を躲し追撃を加えてきた存在が、この古い摺りガラスのはめ込まれたアルミサッシの向こうにいる。

そう……怪しいけど全然経歴は怪しくないけどやっぱり怪しいインド人だ。

あれからあのインド人については少々調べた。無防備にごろんと横になったところを狙われてしまったては今までの苦労も何もかもが水泡に帰すことになるからだ。結果は、面白いくらい面白いことになった。面白いがゲシュタルト崩壊するかと思った。面白かったから仕方ない。

まず身分。ハイ・カーストだった。一生働かなくていいどころか大勢の使用人を抱え、ひがな一日ごろごろと寝つ転がりながらフィクションの中でしかお目にかかったことのない、あの柄が長くクソでかい団扇で煽られながら専属の楽師による生演奏をBGMにフルーツを齧っていても許される人物だった。なんでわざわざ来日して風情のある……いつそ素直に言えばボロい中古のビルでマツサージ屋の店主兼マツサージ師をやっているのか。さらなる調査の結果も面白かった。ただの道楽だったからだ。彼が幼いころ、無聊の慰めに招いた人物が披露したヨガに心酔し、そのまま困って弟子入りしたというのだ。そしてそのまま彼曰くヨーガマスターになった、と。

なんだその金持ちの謎過ぎる金の使い方は。有意義な金の使い方とはなんなのか考えだしてしまうし、考えたところで結論は出そうにないのでこの思考は放棄した。別の次元に生きていると思っただ方がいい。それならまさしく思考回路が違っていてもおかしくない。ちなみに裏との係りは一切無かった。驚きの白さだった。薄暗いことをす

る必要もないレベルの金持ちだからかもしれないが。金持ちのえげつなさを垣間見た気がした。

次に家族構成。なんと家長だった。つまり彼の一族の中で一番偉い人物だった。何をしているんだ日本で。いやマツサージ屋の怪しいオヤジをやっているのは分かっているが。妻がひとり、息子がふたり。息子にもそれぞれ妻がいる。愛人はなく孫もまだいない。ちなみに長男はニートである。いや、ハイ・カーストだから働く必要なんてどこにもないのは分かっている。分かっているが、お前の父親は日本で端金と言っている金額で労働しているというのに何をやっていいのか。

そう思っていたらどうやら株取引に並々ならぬ才能があるようで、一族の資産を更に増やすのに成功していた。元手はお小遣いという名の日本という平均生涯年収だったようだ。秘書にこれ買つといてあれ売つといてとやっているうちに膨れ上がったらしい。もう何も言うまい。やっぱり言う、金持ちえげつない。

調査結果を手にした風見との会話が脳裏に過った。

「ハイ・カースト出身者？なんで日本で怪しすぎるマツサージ店営んでいるんだ……しかし裏の繋がりは皆無だな」

「息子さんのひとりがニートという事でしたが、その、ハイ・カーストなので働く必要がそもそも無いようです」

「……なんで働いてるんだあのインド人」

「……趣味ですかね？」

「趣味、かあ……」

随分御大層な趣味だが、効果は折り紙付きだ。趣味のおこぼれを預かろうとしている身としてはありがたいと言っているのかんなのか。とにかく、真つ白のくせに趣味が理解不能すぎて怪しさを倍増させているこの店に、もう一度世話になろうとしているのも事実だった。安心して身を任せられる人物というのは少ないため、貴重な店だともいえる。

不安にはなるが、そんなじよそこらの金持ちを鼻で笑うことのできる大金持ちが道楽でやっているところで、わざわざ公安に付け入ろうとするはずもなし。同様にして黒い世界に足を浸ける必要もない人物であることは間違いがなかった。

ただちよつと。ほんの少し。いや物凄く。何考えてんだオメーと言いたくなるだけで。

軽く頭を振って思考を追いやる。癒されに来たというのに仕事と重ねてしまうのは悪い癖であり、必要な技能だった。

ネジが緩みかけている取っ手に手を添えて入り口を開けた。

「こんにちは「疲れたー顔のーニッポンジン！横なつてー」

「はい」

挨拶さえさせてくれなかった。やはり彼は何かが決定的に違う世界に生きているの
だろう。

「私ヨーガマスタルね、安心してネ」

「お願いします」

二回目だというのに相変わらず怪しい。そして安心できない。やはり副音声で金づ
るが来たと聞こえる気がする笑みを浮かべて、前回とは違うやはり特売品1枚500円
のような畳の上に敷かれたバスタオルに指をさしていた。大金持ちのくせになんぞそ
んな安物を使用しているのか。今回も洗濯はきっちりとされているバスタオルの横に
座り、上着を前回同様枕の横に畳み、まだ二回目だというのに勝手知ったる感覚でうっ
ぶせになった。勝手は知っているが、それでもちっとも安心できない。妙な緊張感が取
れないのは、この怪しいインド人のおっさんと、相変わらずどこで買ってきたのか分
らないBGMのせいだろう。なんとなく本日の音楽はインドの大衆映画のサウンドト
ラックのような気がした。妙にミュージカル調だったせいだろう。

ぼんやりしていると前回同様に前置きなしでいきなりマツサージは始まった。触れ
るたびに失礼しますのだ、お加減はいかがですかだの尋ねてくれる日本のサービスの有

難みを感じずにはいられない。唐突すぎる。

「背中ツヨイねー!」

「えーと、そうですか?」

「足腰ツヨイ!」

「???」

それはつまり、筋肉がついていると言いたいのだろうか。まず間違はなく日本語が堪能なんだから、わざと妙な表現をしていないで言葉にして欲しい。なんのために言語というコミュニケーションツールがあると思っているのか。

バキバキという自分の体から出ているとは信じたくない不穏な音と、何を歌っているのかちっともわからないBGMを聞き流しながらそのまま身を任せる。いや、勝手に力が抜けていく。思考もどんどん溶けていく。あ~~~~~……………

「ハイおしまいー二千円おいてけよー!」

「……………はい」

快適な時間はあっという間に終わった。光陰矢の如し。違うがそんな気分であった。本日も異様に体が楽になっている。何なんだ本当に。

起き上がりもそもそと財布を用意していると、コンセントからプラグを引き抜くことでBGMを強制的に止めた店主が話しかけてきた。とても個人的な意見だが、その豪快

過ぎる停止の仕方は止めた方がいいのではないだろうか。ただでさえオンボロのラジカセが収集車の世話になる日も遠くないだろう。

「そーだオニイサンいいものあげるよ」

「これは……?」

隣町にあるカレー屋の割引券をくれた。あまりにもベタすぎて笑えて来る。やめてくれ、せつかく全身ほぐれたのに笑わさなくてくれ。なんでこの人は毎度妙な日本人がイメージするインド人を挟んでくるのか。面白いからやめて欲しい。

「オニイサンここ行ったことある? オイシイヨ」

「……ないです。えっと、」

「二千円ねー」

「あ、はい」

ちゃんと会計はしてくれるようだ。

「明日も来てイイよー」

「ええ……? また凝つたら来ます?」

「チキンオイシイヨ」

「あ、カレーも食べてきますね……」

話が飛びまくって反復横跳びをしている店主をそのままに、揃えておいた靴を履いて

身支度を整えると、マスターは遠慮なくテレビをつけてから使用したタオルを適当に引きはがして籠の中に突っ込んでいた。そして客である自分を残したまま、籠をもつてさっさと裏へと入ってしまった。

「えええ……」

ありがとうございましたと言いたいのはこちらではあるが、あまりの適当さに、やはり日本式接客業との差を感じてしまった。いや、もしかしたら金持ちゆえの何かかもしれない。深く考えるだけ無駄だと学んでいるというのに、ついツツコミをいれたくなってしまうあたりこのインド人侮れない。マッサージの腕前も侮れない。軽くなった。

「……また来ます」

一応の言葉をかけると、奥から二千円忘れるなよという元気な掛け声を貰った。

身も心も妙に軽くなったような、それでいて疲労感があるような。釈然としない気持ちを抱えはしたが、やはり軽くなったものは軽くなったので、今回もちよつといい酒を開けようという気分になった。

……カレーはまた今度、調査をしてからにしよう。

断じて快樂墮ちではない

言い訳はしない。疲れたから来た。

自分でもちよつと不味いなと思う程度に思考能力も肉体性能も低下したのを認めただけだ。

三度目ともなると戸惑うことなく引き戸を開けることが出来た。それが成長という名の慣れであるという事実は悲しくなるので直視したくない。

挨拶もそこそこにいつもの手順を踏んで横になると、マスターがマツサージよりも先に話しかけてきた。珍しいこともあるもんだな、と思つたが、この人と会うのはまだ三回目だった。なんとというか、昔から顔を合わせる親戚か近所のオヤジといった気安さがどうしても生まれてしまうのだ。……おちつけ。相手はインド人だぞ。

「よくきたな！横なれ。ソイヤ前も来てたね、タイチヨーフリヨをヨーガマスターに任せしたくなるのわかるけど、ヨーガをマスターしてカラダほぐすといいよ！」

今日のマスターは機嫌がいいようだ。もしかしたら彼も慣れてきたのかもしれない。……三回しか顔を合わせていないのに妙に馴れ馴れしい気もするが、考えても無駄な事というものはいくらでも存在する。この怪しいマスターのことを真剣に考えるくらい

なら、角砂糖をほぐして結晶を一粒ずつ数えていた方がマシなことに思える。

「運動はしてるんですが」

そうはいっても会話は大切だ。安室透という存在は人を邪険に扱ったりしないキャラクターとして生み出したからだ。外では安室透、安室透だ。だから毎度骨抜きのでろつでろにほぐされた情けない笑い上戸は降谷零ではない。断じて違う。

「使つてない肉あるよ！ホーレホレホレホレホレ」

ゴキツメキメキメキゴツ、と、軽快な言葉とは裏腹に本日も盛大な音を身体は奏でた。いや、心なしいつもより激しい気もしないでもない。不安が加速する。

「アレー？！」

「なんですか今の音、何ですか今の声!？」

「ラクになるー」

「……。」

確かに楽にはなった。ここのところはデスクワークが主体で腰から足の付け根がだるかった。それは認める。

でもなんで腕や肩から出た不自然極まりない音で腰から下が楽になるというのか。人体の神秘が奥深すぎてついていけそうにない。マスターのノリにもついていけない。

その後も全身から嫌な音を立てる時間は続き、安室透は骨抜き状態になった。いい

か、安室透が骨抜きになったんだ。

「効いたね！二千円置いて帰ってヨ！」

「えーと、お代です」

悔しいが確かに効いた。それでもつて機嫌が良くても本日も無情に追い出されようとしている。

「お札が2枚、誤魔化しナシの円！カレー食べた？」

「ええ、美味しかったですよ」

覚えていたのかと思いつつも、一応接客業だからそういうことには細かいのかもしれないと考えを改めた。

あの隣町のカレー屋は調査結果でこの目の前の怪しいオッサンがオーナーであり、調理人は家から連れてきたシェフだということも判明しているために行ったのだ。

シェフはどうやらマスターとは親友らしい。身分の差というものをあまり気にしないマスターは、使用人たちとても仲が良いというのも大使館からの情報で知っている。

「あそこ息子よりオイシイ。息子はダメだね、ナンも不味い」

「…息子さんも店やってるんですね」

息子はニートじゃなかったのか。ああ、もう一人の息子の方が。

「ニートしてるよー。」

「ええ??？」

やっぱりニートの息子の方だった。なんなんだ、なんなんだこの親子は。労働なんて一切せずに一生を終えることを許された人らだというのに、息子も調理場に立つというのか。

いやこのマスタールにして息子ありだな。父親が日本に来てまでマツサージ店の怪しいオヤジをやっているように、息子も調理場に立つて調理をするのだろう。彼曰く腕はそう良くないようではあるが。

「息子ネー、服欲しいってゆーのよ、外歩きたい、ニッポン行きたいからってー」

「はあ?」

まだ続くのか息子の話。本当に今日は機嫌がいいのかもしれない。というか、ハイ・カーストなら服屋の資本ごと買い取れるだろうに何を言っているんだ。

「私に似てワーガママ! あーはははワーガママアー」

「ええつと」

好きにマツサージ店やるのも我儘……なのか? 我儘とはいったい、何を指す言葉だっただろうか。

ちよつとスケールと方向性が違い過ぎて理解できそうにない。

「だからお古あげたヨ、マスターの」

「……ええ？」

お古をあげた、という言葉でついまじまじとマスターを見つめてしまった。どこの街にもある大手量販店の服だ。カタカナ四文字の、CMもやっているあの会社のシンプルなシャツだ。前日も確か同じメーカーの量販品だった。

と、いうことは息子はこの大量生産品の服をお下がりで貰ったというのか。買ってやれよハイ・カーストで履いて捨てるどころか日本で中古のビルを買ってマッサージ屋を営む金があるんだから。

やはりマスターはマスターという生物であり、同じ感覚を有する存在ではないのかもしれない。漠然と失礼なことを思い浮かべてしまった。

「マスターいい服持つてるよー」

「はあ」

あ。やっぱり良い服をあげたのか。高級品ともなれば親子で着ることがあっても自然ではない。高品質なものは劣化しにくく、受け継がれることは別に珍しくないからだ。彼ほどの家ならばデザイナーだっけって困っているだろうし、量販品を渡したというのは酷い誤解だったのだろう。

心の中の出来事とは言え謝罪をする。申し訳ない、あなたに妙な偏見を持ってしまっ

ていた。

「ユニタロのシャツあげたの!」

「い……服?」

前言撤回。当たってるじゃないか。

「三回洗ってもヨレヨレにならないヨ!襟も見てホラピンピンしてる!にーさんも買いなユニタロ!!」

「いい服……ユニタロ?三回……?」

「色水被つても洗えるヨ!」

「日本にホーリー祭はありません」

洗つても落ちないような謎の染料を思いつきりブチ込んだ色水飛び交う祭りは遠慮して欲しい。

ただでさえ昨今はハロウィンで羽目を外す者たちがいるというのに、無法こそ合法とでも言いたげな祭りを開催されてしまつてはたまつたものではない。自身の白い愛車がキャンバスに見立てられ、見るも無残な姿になつていくであろう祭りを思つて頭が痛くなつた。

おかしい、僕はついさつきマツサーズを受けたはずだ。いや受けたのは安室透、安室透だ。だから被害にあうのも安室透……いや、車は共通だ絶対にホーリーだけは阻止し

たい。断じて独特なカラーリングにしたいわけじゃない。

色で塗りつぶすのはイカのゲームだけで充分だ。

「ホーリー楽しいヨ？オニーサンも一緒にどう？」

「やりません」

「色つける粉ならインドで買えるヨ？」

「買いません」

だめだ、心労が酷い。悪夢のカラーリングになってしまふ愛車を思うとつらい。

大事に大事に乗っているとは口が裂けても言えないが、それでも愛着もあるし可能な限りメンテナンスをして保持をしているのだ。むぎむぎ落ちない色水に晒されるのを黙ってみている趣味はない。

「ア〜ッハツハツハツハ！お疲れになっちゃった？サービスいる？」

「……なんですか？」

ひとを疲れさせておいてこのインド人、いけしやあしやあとと言いやがる。そのやたらと似合っているターバン剥ぎ取るぞ。

そんな怨念の籠った視線をもともせずに奥へと引き込むと、ラベルの剥がされたペットボトルをもつて戻ってきた。

白い飲み物のようだ。

「ラツシーやる。飲め」

「いえ、いりません」

そんな何が混入されているか分からない上に衛生状態の悪そうなものが飲めるか。

「あ、そう？じゃあマスターが飲んじやう。んんん、オイシネー」

ごくごくと嚙下するところを見ると、本当に不味いものは入っておらず、善意のようだった。

だがその善意を素直に受け取るわけにはいかない。自分は、僕は。この国のために。

「ラツシー飲まないなら t a n d o o r i c h i c k e n のサービス券あげる。オイシーよ！おススメ」

「ありがとうございます」

でも自分の気持ちに素直になるのも大切だよな。うん、あそこのカレーは美味しかった。流石、ハイ・カーストお抱えのシェフの店だ。物凄く美味しくてナンをどれほどお替りしたことか。絶対に次はチキンも食べよう。

さつきまで再び重くなっていた身体は、魔法の紙切れ一枚で見事に復活を果たした。マスターは本当にひとを蘇らせるプロだ。やはり彼は聖者だ。

また来いよ二千元持って！

その声に笑顔で応えて店を後にした。

さて。この後もう一仕事頑張ろう。そうしたらマスターおすすめのチキンを食べよう。

チキンを食べて、活をつけて。明日の日本を護るんだ。そう、僕は降谷零。マッサー
ジに骨抜きになった男は安室透。あれは、僕じゃない。

もっと自由に笑いたい

今日も今日とて東都は事件がいっぱいだ。降谷の愛車のお供には少年が。つまり、犯人を追っていた。

少年の指示に従い角をいくつも曲がり、着実に追い詰めていった。

「逃げ足が速いな……」

悪態をつき逃げる男を追っていると、助手席に座ったコナンが声をあげた。

「安室さん、あそこのインドの人がいる角、右に曲がって！」

インドの人。言われてみれば十字路で信号待ちをしているインド人……降谷にとつてもはや見慣れた相手である男がいた。マスターである。

「!?（マスターがハイ・カーストのインド人らしい格好で出歩いてる、だと？くつ、そんなの気になっている場合じゃないのに……!）」

「安室さん！インド人を右に!!」

「分かったから、分かったから!!」

切羽詰まっているというのにコナンは降谷を笑わせようとしてきた。いや、彼に咎はない。何がいけないのか。降谷は瞬時にマスターのせいにした。冤罪である。

彼だつて常にマツサージ屋とカレー屋に詰めてゐる訳じゃ無し。量販店の衣服ではなくおめかしして出掛けることだつてあるだろう。威厳たつぷりの堂々たる姿は服に着られるなんてことはなく、見事に着こなしている。ただちよつと普段と差があり過ぎて面白いだけで。

絶対にあとで問い詰めてやるからなあ……！

無事に、無駄に俊敏に逃げ回つていた犯人を捕らえることに成功し、戻つてきた日常を噛みしめる。

昨日はあのあと事後処理に追われて店に行けなかつたが、どうせあれほどめかし込んでの外出だ。店に行つても休業日か外出中のままであつただろう。とても気になり過ぎて夢に見るかと思つたが、流石に夢の中にまでは登場しなかつたことには安堵以外生まれなかつた。夢の中でもマスター節を味わうなんて冗談じゃあない。自分の笑い声で起きるといふ不名誉は起こらずに済んだのだ。沽券は守られた。

法定速度を守つた運転で例の店からほど近いパーキングに停車し、道を行く。マスターには是非あの格好の事を尋ねなければならぬ。ネタ的な意味でも気になるけれども、公安的な意味でも把握しておきたい。ネタバレ上等等どこか気になり過ぎて仕事に支障が出たらたまらない。本日留守であつたのなら今夜こそ夢に現れそうでもある。

沽券が危うい。

「なに来たの？早く横なつて二千円置いてけ」

出会い頭にこれ。あんまりである。

「お急ぎですか？」

「チキン食べたいのよマスター！t and o o r i c h i c k e n 食べたいノヨ！」

「前も思つたんですが、発音いいですね」

「英語も話せるよイギリス東インド会社もあつたからね」

「重い歴史ですね」

相変わらず話が飛びすぎて本題に入れない上に、マスターの脳を占めているのは客である降谷の事ではなくタンドリーチキンの事であるようだった。

「歴史はゾウより重い！お喋りよりchicken! chicken!」

「チキン連呼やめて下さい」

まるで降谷がチキンだと言いたげな言い方に、思わず苦笑いが漏れた。だけど今日はチキンの話よりも昨日のあの姿の方が気になるのだ。横になるための支度をしながら勿体ぶらずに本題を聞く。切り込まずにいたら本当に無駄話もせずさっさと人を骨抜きにするだけして去ってしまいそうだったので。

「お休みの時はどうなさつてるんですか？」

言外にあの格好なんですかと混ぜておく。だって大量生産品以外の服装なんて初めて見たから。

「テレビ見る、そして歩く」

「歩く」

妙に格言じみた言い方である。早速笑いそうになる。この人と対峙すると笑いのツボがとことんばらまかれるような気になってくる。地雷原か。

「ヨーガのレッスンしに行くコトもあるよ、スズキのそだん役仲良しネー」

まさかの名前に一瞬強張りそうになったが、気合で押し込んだ。

「どこでお知り合いになったんです?」

「ケツ関係ないヨ?」

「くっ」

だから、日本語分かっているクセにそういうネタを挟んでくるのをやめろ。なんでイメージする語学が変な方へ走るインド人を挟んでくるんだ。わざとだろ。知っている。笑う。わざとらしくあからさますぎて笑う。

「どこで相談役と仲良くなったんですか?」

「カレー屋」

「あそこですか? 確かに下手な高級店より美味しかったですけど。あそこですか?」

大金持ちが経営している潰れたコンビニを改装して経営しているカレー屋に大金持ちがやってくる。だめだ、お金持ちの考えることがわからない。

あそこは値段もリーズナブルだ。ナン食べ放題タンドリーチキンセットはプラス二百円でお好きなドリンクおかわりし放題になる。ランチ価格はセットが六百円、ドリンクつけても八百円なので、マツサージ一回分の報酬である二千円があると二人で満腹になれる。

そんなお店にやってくる鈴木財閥の相談役。なんなんだ、本当に。あの相談役ならホテルでランチじゃないのか。

「家から連れてきたシェフがやってるから美味シよー」

「連れてきた」

資料で知っているけれども改めていわれるとインパクトが凄まじい。

「私我儘だよ！私マスターワীগアマあ、あはは」

「はは……」

本物の金持ちにはえげつないな。そんなことを考えていると本日も何の掛け声もなく関節技じみたマツサージは始まった。

「おしまい！二千円置いてけ!!」

「出しますよ、出しますから！」

急いではいるものの、仕事は手を抜かないマスターのお陰で本日も無事健康になった。だが、会計はそうもいかないようでせかしてくる。会計も仕事のうちだというのに自由人である。

「ハリー！そのお金で t a n d o o r i c h i c k e n 食べ行くんだからハリアツ
！」

「これで支払うつもりだったんですか!？」

「ソダヨ？にーさんも一緒いく？マスター奢るよ？」

「行かないです」

「ラツシーも飲んでokだし」

「結構です！」

なんでこの人は執拗にラツシーを飲ませようとしてくるのだろうか。理解は出来ないが、一押しなのはわかった。

文字通り背中を押されて追い立てられるように店を出ると、マスターも一緒に店を出ていた。そして、啞然とする降谷の横で扉に鍵を掛けていた。

「これ？防犯予防」

「いや、そうじゃなくって」

あまりに見つめていたせいだろう、鍵についての説明があった。うん、まあ。防犯意識があるのは良いことだ。たとえばボロボロのビルのせいでプロの窃盗犯には何の障害にもならない鍵だとしても。

「ホラ行くよカレー屋」

「行かないですからね!？」

「そなの？サービス券……持ってないや。これはマスターの分だからあげられない」

使うのかよドリンク無料券。お前が経営者だろ。言いたい言葉を飲み込んで、行かないと再度伝えればマスターはあっさりと「そなの。じゃーね」と颯爽とカレー屋に向かっていた。力が抜ける思いがする。実際、ほぐされきった体はあまり力が入らないのだけれども。

「……結局服の謎は解けずじまいじゃないか……」

ご婦人が抱き上げているチワワに不審なものを見つけたと言わんばかりに吠えられまくりながら雑踏を行く背中にため息を一つついて、パーキングに向かった。どうか今夜の夢の中に彼が現れませんかのように。念を込めて回したキーは、愛車のエンジンを回転させた。

おまけ

なんだか全体的に健康が増してきたポア口閉店後の清掃雑談

「安室さん、何かいい事でもありましたか？」

「え？いいことですか？」

「なんだか、前より足取りが軽そうで、それにお肌もツヤツヤですよ！」

「そうですか？」

「そうですよ、2ヶ月くらい前からちよつとずつ！」

「（……通い出した時期だ）」

風見はよくわからない先入観を持たれている

上司が何度も世話になっているといふ噂のマッサージ店に来た。

……あの、降谷さんが虜になったマッサージ店だ。

調査の段階では不自然だが黒い動きはなく、趣味といふべきか、道楽でやっているといふのは間違いがないようだ。

降谷さん曰く、とてもよく効くが店主が個性的だという。なかなか濃い個性なのは書面でも理解しているが、百聞は一見に如かず。そういうわけで、このうらびれた、看板までも輸入商品の取扱説明書のフォントのような怪しい店に来たのだった。

「こんにちh「横なれニッポンジン！」

上司の正確な情報通り挨拶をさせてもらえない。第一声が怒声じみているという話はないが、本日は虫の居所でも悪いのかもしれない。

それを隠しもしないところに、何故か安心感を覚えてしまった。

接客業はどんなときでも笑顔という鉄則を打ち破ってくれる存在こそ今の日本には必要な存在なのかもしれない。いや、そうじゃない。しっかりしろ。もしかして、自覚している以上に疲れているのかもしれない。

「お願いしま、す?」

眼鏡を外して枕元に置き、安っぽいバスタオルの上うつぶせに横になると、親の仇か何かと言いたくなる挙動で店主が勢いよくマッサージをはじめた。唐突にやられるとは聞いていたが、本気で唐突過ぎて処理能力追いつかない。

「コリコリばつか!コリコリコリばつか!!」

ひとの体をコリコリと音を立てながら解すマッサージ師が怒りながらも仕事をしている。なぜだか無性に笑いたくなくなった。いや普通に笑う。なんで初対面の客にマッサージしながら怒りを発散させているんだ。

「すみません」

「謝るのメッ!謝罪No!No!!」

ゴツキイ!!と、とんでもない音が自身の肩甲骨からした。一瞬で頭が空白になる。痛みはあるが、骨や関節にダメージを受けたものではない。だが、一瞬呼吸は止まった。

「がっ、……!」

「メガネすぐ謝る!メガネ謝る!!」

「ちが、ちがいま……!」

眼鏡謝るってなんなんだ。

そういうえば最近謝罪していることが多い気がする。主に上司に向かつてではあるが。だからって眼鏡は関係ないだろう。眼鏡イコール謝罪という方程式がこの人物のなかに存在するのであれば、是非とも訂正してもらいたいものだ。

その後もゴキゴキと不安になる音と体が癒えていく快感に浸っていると、どうやら仕事を終えたらしい店主が痛くない張り手を一回、背中に食らわしてきた。

「ほらよ二千円!!」

こんな請求を友人同士の貸し借りでさえしたことがない。ましてやサービスを売っている側からここまでいい加減で不適切な請求をされたことなど今までに一度たりともなかった。あつてたまるか。あつてたまるかと俯瞰視点の自分が嘔いた。

そうだな、あつてたまるものか。やはり日本に必要なものは心づくしが行き届いた丁寧な対応だ。それに見合う報酬があるべきであつて、ここまでぞんざいな対応はまだ日本人には早い。早すぎる。ついていけない。世界に取り残されてしまう。

この部分だけは周回遅れでもいいかもしれない。対価は支払われるべきだとは断言できるが。

「に、二千円ですね」

眼鏡を掛けて財布から千円札を二枚取り出す。そういうえば二千円札なんてものも昔はあつたな。

最近はとんと見なくなったが、一部地域では流通していると聞く。この店に今後も通うならば、そんな東都では珍しくなった紙幣で支払うのも面白いかもしれない。

入手のあてはないし、こんなところで仲間を動員させてまで手に入れようとも思わないが。

「ちゃんと二千円！眼鏡つけてまた来いヨ!!」

「え、あ、はい」

言葉の意味は良く判らないが、どうやら嫌われてはいないようだ。

なんとなく、上司が色々な意味でこの店主に骨抜きになつてゐる理由が分かった。

マツサージは、はちやめちやに効いてどこかのドリンクのキャッチフレーズのように翼を授けられたように軽く、心なしか頭まですっきりしている。

価格も人によつて変えるなんてことはなく安価で、サービス業とは思えない接客態度を差し引いてもこの三倍は支払つてもいいと思えてくる。

それに、店主は怪しいし正直よくわからないが良い人だ。たぶん。慣れていないけれど面白いし。

なんなんだ、眼鏡つけて来いって。今日も掛けてただろう。

意味が分からないしニヤリという音が似合いそうな悪い顔をして手を振つて見送る

……いや、店から追い出そうとしている店主はやましいところが無くても非常に胡散臭

く怪しかったが、また来なくなる謎の魅力を振りまいていた。

あれからまだ数日しか経過していないが、再び例の店にやってきた。

自分でも情けなくなるような細かなミスをしてしまったり、夢見が悪かったりとしわと削られる思いをし、普段なら跳ね返していることだというのに妙に心に残ってしまい、このままでは良くない、早急に気分を変えなければと自己診断を下したのだ。

専門医でもなんでもない自己精神分析などあてにはならないが、経験則から己の中に発生した小さなしこりを放置しておくときに大きくなってしまおうというのは心得ている。

その小さなストレスの塊をうまく処理出来なくてなにか公安か。

よって本日はそのしこりが肥大化する前に処置に来た。正しい判断といえる。いえるのに、妙に胸を張って言えないのはなぜなのだろうか。

何も悪いことなどひとつもないのに、どこかしら後ろめたい。福引で前の人に参加賞のポケットティッシュだったのに、自分だけ洗剤詰め合わせが当たったような後ろめたさ。意味の分からない例えだなど、本日も俯瞰した自分が呆れていた。その通りすぎたしこりが少し大きくなった気がする。

こんな下らない自分の思考にまでストレスの影響が出ている。早急に対処をしなけ

れば。いぎ天竺へ。ちがった、マツサージ店へ。

「こんにちは」

今日と言えたぞ。達成感が凄い。二回目でしかないのに。

「アイアムヨーガマスター、横なれ」

「はい、お願いします」

そういえば前回は口上も聞いてなかったな。何故か怒りに任せたような態度だった。なのに仕事は丁寧……とは言い難いかもかもしれないが、やるべきこと以上の成果を己に与えてくれた。そこは感謝をしている。

本日は前回よりも接客業らしい対応をしてくれている。それだけで妙な感動を覚えてしまった。息子の成長を喜ぶ母親か。断じて違うから落ち着け。冷静になるんだ。

「お疲れちゃん？」

「ええ、まあ」

「ヨーガやりなよ。好きでしょサイババ」

「いえ別に好きでは……」

なぜサイババ好きだと思ったのか。別に好きでも嫌いでもない。勝手にサイババ好きにするのは止めて欲しい。笑ってしまいそうになるから。

「ヨーガすると飛べるよ！私も飛ぶよ、ひこーきで！あはははは、ほいつ」

「ぐ、ぎゅー」

無茶苦茶なことを言うと言せかけて当たり前前のことを言いながら、横になった瞬間マツサージは始まった。

喋り方は前回と違って穏やかささえ感じるというのに、手の温かさも力加減も、体への影響も身体から発生したと思いたくない音も前回と同じだった。

ああ、BGMが少し違うな。前は剣の舞のみを延々とリピート再生されていたが、本日は数学者であり哲学者のピタゴラスの名をもじった番組の使用曲集だった。……あつたんだな、そんなCDが。

軽やかで明るい曲調と鈍く重いマツサージで発せられる音が妙な合致をみせ、脳がとろけるような気分になってくる。

ややトランス状態に入ったような不思議な気分だ。まさか子供向けの番組の音楽でトランス状態に近い感覚になるとは思わなかった。いや、中毒性があるのは認めるが。

そうして今日も身も心も解された。なんとという解放感。店に入る前に抱えていたストレスも、微妙に高さがあつていないデスクのせいで溜め込まれた首の疲れもきれいに消えている。

ああ、これは無理だ。また通つてしまう。

「オシマイ！ラッシー飲む？」

「いえ、おかまいなく」

「ダメだよ、ダメだよ眼鏡。マツサージの後水分補給だいじ。なんか飲め」

「え？あ、はい。じゃああとで飲みます」

前回そんな話出なかつたぞ、どうした？と思つたら、例のカレー屋のドリンク無料券を渡された。

「これでラツシーも飲み放題ね。行つてくるといい」

「……マスタル!!!」

ちやつかりしているが、どうにも聖人じみたこの怪しいインド人の事を、どうしても疑い切れないのだ。

そのわざとらしい演技の向こう側に、あまりにも優しい光が見えるせいかもしれない。

「ン〜善行積めたよ！じゃあ二千円ちよーだいね」

「はいっ！」

「またおいで眼鏡掛けて」

「はい!!」

相変わらず言葉の意味は分からないけれど、近い内にまた来ようと決心した。

余裕をもったタイムスケジュールにしてある。ラツシーを飲みつつカレーを食べに

行くには、丁度いいかもしれない。
そんなことを考えながら、軽い足取りで店を後にした。

區別されるもの

都会と言えど街の明かりも減った時間帯。それでも間接照明の灯ったバーの一角で、ひと組の男女が酒を傾けていた。

だがそこに色恋の気配はなく、それでいてなにか近寄ってはいけない雰囲気は漂っており、夜を歩きなれた賢明なものたちは、あえて声を拾おうとしなかった。

それは人の話を盗み効くのはマナー違反だからという、ある意味当たり前の行動ではなかったが、長く夜を楽しむためには余計なものに係るのを極力避けるべきであるという経験則と不文律からだった。

「あなた、とうとうインドの秘薬に手を出したんだって噂よ」

「根も葉も無さすぎて組織の行く末に不安を抱きますね」

にこやかに皮肉を言いながら、彼の内心はそのまま壊滅してしまえと組織を呪った。「でも確かに髪も肌も艶やかになったわね」

「やってみませんか？そもそもそんな怪しげなものに手を出すだけでも？」

「そうですね」

彼の言い分はもつともで、麻薬類に代表されるように非合法の薬品類は上の立場にな

ればなるほど手を出すものがいなくなる。下っ端の売人の中には我慢できずに商品に手を出す愚か者もいるが、上り詰めるようなものは経験はあれど依存するような愚は犯さないものだ。

「秘薬、ね……」

ついに押し付けられてしまったものの、危険な成分も雑菌の繁殖も無かったから愛飲してしまっていたが……湯上りにラツシー飲むだけで肌艶が良くなったのは確かだ……：マスタルのラツシーは秘薬だった……？いやそうじゃない！どこでインドと関連付けられた？出入りしているのがバレたのか？しばらくマスタルのところに顔を出すのは控えなければ。

そんなことを考えているだなんて知らない美女は、悠然と微笑んで彼に尋ねた。

「顔が怖いわよ？大丈夫？」

「根も葉もない噂が鬱陶しくて」

「そう……」

それでこの話は、表面上終わった。

だが、彼女はそれで納得するような存在ではなかった。根気よく彼の足取りを辿ってみれば、一軒の店舗によく足を運んでいるのが判明したからだ。

「(ト)ト、よねっ」

訪れた場所はやや鄙びたビル。普段の自分の生活とはかけ離れた場所ともいえるところだった。

カラカラと扉を開けると、外観にぴったり一致するような内装の中、外観に全くそぐわないインド人と思わしきジジイとおっさんの中間に位置するような、ある意味年齢不詳のおっさんがいた。

色々この店について調べてみた結果は白。本当に施術を受けるためだけに顔を出しているようだ。

調べている最中、様々な伝手により、ここは技術力のすばらしさがずば抜けているというのに、灰汁の強さと並ぶ入りづらさが天然の結界となつて人を寄せ付けず、常に人の視線に晒されるような美貌と名声の持ち主がお忍びで訪れても、誰も騒ぎ立てない店だということとは把握していた。

余人を寄せ付けないと言えば彼女が世話になつている会員制の高級店もそうなのだが、そういった場所でも事情により視線に聡い彼女は、見られている感覚が抜けきらず休まることがない。

もちろん店員はしつかりとした教育の施された最高の人材ではある。でも、それでも瞳の奥に隠された好奇心や憧憬、あるいは嫉妬に近いものを垣間見てしまえば、気を許すなんてことは出来そうになかった。

とくに、後ろ暗いものを抱える者にとっては。堂々としていればかえって怪しまれないものだが、どこにどんな恨みを持つものが紛れているかなんて、わかったものではない。ゆえに。そんな中で本当に気を抜くなんてことは出来ないのだ。

だというのに。

「横なれ。アイアムヨーガマスター、安心しろ」

「……あんまり安心できないわね」

いきなりこれ。気が抜けた。抜いちやいけないのに気が抜けた。警戒するなんてもつてのほかな程気が抜けた。滅茶苦茶あやしい人物のフリをしているのがバレバレである。そのうえバレバレだろうと気にしないどころか、怪しまれようがフリだとバレようがお構いなしな自由人っぷりである。

そんなことより、マツサージだ。ぶつちやけて言ってしまったえば、警戒したまんまだと休まらねーんだよ、人体の腰への負担はんばねーのになんで人間は二足歩行なんだよ、おまけにヒールとか慣れても疲れるもんは疲れるんだぞ、私は癒されたいんだ。

これ。これが本音。

私を解放させてほしい。

ぼうつとしてしまっていたせいとか、訝し気な店主が「マツサージするんじゃないの？ ヨーガのレッスン？」と尋ねてきたが、マツサージで合っていると告げて、安っぽい……

じゃなかった、特売の投げ売り品のバスタオルの上に横になる。

何とも言えないデザインのパスタオルを前にして、どうして無難に無地で作らないのかと不思議に思わずにはいられなかった。ここまでの安物をもうずっと利用していなかったこともあつて、妙に新鮮味を感じてしまうのも不思議な話だ。

ごろりとうつ伏せに横になれば男が近づいてきて隣に陣取り、さつきまで別にしていなかった怪しげな笑みを貼り付けて口をひらいた。

「マスタルに任せればイチコロよ！」

「その、取つてつけたような雑な演技はなんなの？」

そのわざとらしい姿に彼女は耐えきれず、とうとう突つ込みをいれてしまったのだつた。

「みんなインド人に神秘求めてるからネ！世の中面白く生きないと息詰まる。息止めると健康によくはない。あーははははは！」

「真理、ね！」

ついに例のマッサージが始まった。この店の世話になったことのある男性陣が見れば目を剥くこと間違いなしの、丁寧なものでスタートした。そう、優し気にほぐすところから始めたのだ。

女性には優しく。だがその気遣いは男性陣への手荒な施術を知らない彼女には全く

通じないものであり、男性陣からしてもちやんと手加減して始めるなんてことは決して知られる事はなかった。店員がマスターただひとりなうえ、閑古鳥が鳴いている店に救われたのは、ある意味全員だろう。

だって、知ってしまったら悲しくなるし、微妙な気持ちになるし、疑惑の目を向けられていたかもしれないから。いかにマスターが性的な目を彼女に向けていなくとも、もしやと邪推する人もいるかもしれないし、差別だと嘆くものもいるかもしれない。実際には区別である。そんな言葉も無用な程、店には客と店員しかいなかった。

「死んじゃうと来世までマツサージ受けられないからね、健康健康」
「そうね」

扱いに慣れてきた彼女の返事は結構な投げやりだったが、それを気にするマスターではない。器が大きいというか、おおぎっぱというか。兎にも角にもマスターである。

が、マスターであるがゆえ、それはやってきた。

「私もお客さんも健康ー!」

愉快さを湛えた、輝かしい笑顔で彼の手の動きがほんの少し変わると、音がした。誰しもを高高度から不安の谷底に叩きつけるあの音である。

ミシミシ、ゴツ、バキン

「健、康…?」

マスターの手によつて自分の体から奏でられた音に、真つ黒な組織で女幹部をやつて
いる彼女も、例外なく谷底へと招待されたのだった。

色々と不安を抱えたけれどもやっぱり彼の施術の効果は異様に高く、すつきりとし、
彼女からすれば財布の中身が軽くなったとは全く思えない金額を支払い、帰路に就く。
とはいつても、仮宿にしている東京都内の某高級ホテルだが。

その日の晩は良い気持ちで長風呂をし、酒精を口に含むことも無く、程よいスプリン
グのベッドに横たわれればあつという間に朝を迎えた。実にさわやかな寝起きである。
朝の奇妙なダンス……ラジオ体操を第一どころか第二までやつてもいいと思わせるほ
どの気持ちの良い寢覚めである。

一瞬やろうかと血迷つたが、普通のストレッチに変更した。伊達に裏社会を生き抜い
てきたわけではない女幹部の賢明な判断能力が光つた。

だが本日も悲しいかなお仕事がある。どこかの人力ケルベロスさんほどではないが、
彼女も結構忙しいのだ。忙しいから今日も遠慮なく足を呼び寄せて利用した。彼女に
とつて白いRX-7は、もはや公共交通機関と同義である。利用しない手はない。人力
ケルベロスさんは決してしないだろうが泣いていい。

「寝起きは爽快で肌の調子も良好、なんなの……噂が一人歩きしただけだと思つていた
のに」

「なんの話です?」

思わずこぼれた彼女の独り言を運転手の耳がとらえた。足になってはやるがタダで乗せてやるとは言っていない。分捕るのは現金ではないが、普通のタクシーの乗車賃より高いものをせり取る気満々である。無賃乗車なんて絶対にさせない強い意志を感じさせる。心強い。

「バーボン、調べて欲しい人物がいるの。大至急よ」

「あなたが態々?」

言外に自分で調べられるだろうにという不信感をにじませながら。

他にはまた仕事増やしやがって、これで求めている情報がスマホで検索すれば済むようなモノだったら許さんぞ。黒に繋がってるならまあ無駄骨じゃないと思えるけど、それでも余計な面倒はなるべく避けたいという感情もあったが、それは全部、ツラの皮の厚さという名のATフィールドで覆い隠されたのだった。

「御託はいいわ。Xにあるインド人がやっているマツサーj「大富豪の道楽です」

「道楽」

「息子はニート」

「ニート」

もうすでに調べつくしてある情報であったし、受け渡したところであのヨガとマツ

サージにしか食指の動かないマスターが、組織になびくはずも無し。

でも一応、無難な情報だけ渡しておいた。彼女が求めている情報も困りたいからとかではなさそうなのは、RPGの宿屋に泊まったのかと言いたくなるような、HP全快の肌艶潤う様子を見ればわかる。

……ベルモットも、行っただな。

なんだか同志を得たような気持になったが、その結束は脆く、実はマスターが女性には導入が優しいという裏切りに遭っていることを。

きつと近いうちに

マツサージ屋の営業時間は安定していない。不定休なんて程度ではない。

今日日検索すれば大概の店舗の営業時間は判明するというのに、この店に限って言えば趣味であり娯楽の一環であるせいなのか、はたまたマスターの性格ゆえか、なんでも己の望むままに生きてこれた環境のせいなのか。とにかく自由である。

あらかじめ電話をかけて本日の営業について尋ねておくのが一番正確ではある。

あくまで一番正確なだけであり、案の定きちんと電話での確認を取り、「今日？ヤツテルヨー、営業中営業中」という言葉を信用して来店した年上の部下が、すごすごと来た道に戻るようになった出来事もある。公安内部でまことしやかに囁かれる、『風見の泣き戻り事件』である。後にこれは電話を掛けた時点では営業中であつたが、途中で近所の小学生に混ざつてダルマさんが転んだをやつていたため臨時休業になつていたと判明した。

なにをやっているんだインド人。遠い異国の地に来てまで子どもたちと触れ合いたかつたのか。ニートの息子を構つたらどうだ。とつくに成人していて妻までいるのは承知しているけど。不審者も多いご時世、地域の子供たちを見守ってくれていたのは感

謝するが、その怪しい言動のまま子供に間違つたインド人像を植え付けるのはいただけ
ない。そのうえそれがウケて妙に子どもに人気なのも腹が立つ。

なぜこうも八つ当たり気味なのかというと、ベルモットの詮索でマスターとの関係か
ら公安まで辿り着く危険性を感じ、ここしばらくはマツサージを受けに行くのを自粛し
ていたからだ。そしてこちらが自粛していても周囲はそうでもない。風見がこちらが
行けないのを知りながらも、己の欲求に従つてマスターのもとへ行つて泣き戻つてきた
話を聞いた時は、とてもとても胸がすく思いになつた。お前だけにいい思いなんぞさせ
るものか。僕らは業務上、運命共同体も同義。死なば諸共。だがそれはプライベートで
は発揮されない。悪いな風見、今日は全面的にオフにすると決めているんだ。お前もよ
かつたら後日訪れると良い。今日はこちらが堪能させてもらう。

ああ、このいつそ懐かしさすら感じるおんぼろの戸口をどれ程夢に見たことだろう。
そんな妙な感動を抱いてしまったのも、仕方がない話だ。かれこれ実に三か月ぶりの訪
問だ。正直に認めよう、もうマスターのマツサージのない生活なんて耐えられない。冷
蔵庫や洗濯機のない生活が苦痛であるように、マスターのマツサージの恩恵がない暮ら
しは、知ってしまった後ではもう戻れない。マスターは白物家電なみに生活に必要なも
のなんだ。

……もういつそ永住してくれないだろうか。一家に一人マスター……は、だめだ。さ

さすがに鬱陶しい。街中の至るところで溢れかえるマスターや、田舎に不法投棄されるマスターののことを考えてしまったなんてことはない。溢れかえる胡散臭いインド人だらけの日本など、僕の知っている日本じゃない。もつとこう、奥ゆかしい感じが日本だ。

馬鹿なことを考えつつ扉を開ける。鍵は開いていた。いける。

「こんには……！」

感極まった挨拶をしてしまった。若干声が震えてしまった気がする。なんだこれ生き別れの親子の再会か。マスターが親だとすると生活面は苦労しないどころかうっかりしたらご長男と一緒に道を辿りそうだが、日本で育った氣質がそのままなので苦労はしそうだ。でも親族ならマッサージ受け放題なのでは？ いやダメだ、親にマッサージさせてぐうたら過ごすなんて、絶対にダメな奴だ。自分の中の倫理観とか道徳観念が全力で説教をしだす。誘惑は感じてしまうけど。

「なんだオメー久々来たな。ヨーガマスターしたから、もーマッサージ要らないんじゃないのか」

なんだそれ。どこ情報だそれは。運動はしているけど、ストレッチはするけど、ヨガはやってないぞ。

怪しげなソースのない情報源を探りたい気持ちはあるものの、ベルモットもインドの秘薬とか適当なことを言っていたので無駄な情報を追うのはやめる。

今欲しいのは情報でも噂を流した阿呆への制裁でもなく、癒しだ。歓迎されてないよ
うな言い方をされてしまったけれど、熱烈な歓迎よりも物理的な癒しを欲しているん
だ。だから、そう。この殺伐ささえ感じる出迎えにすら癒しを感じるのは止めるんだ降
谷零。ああ変わらないなんて安心感をこんなところで得るんじゃない。これは、あた
たかで平和な象徴なんかじゃないんだぞ。しっかりしろ。癒しはこれから受けるんだ。
もう受けたような気持ちになるんじゃない。フライングにも程があるぞ。パブロフの犬
か。僕は国家の犬でありたい。犬のおまわりさんだわんわん。……違う、本当に落ち着
け。

「あはは……ヨガはやってないですよ。ちょっと最近忙しくて来れなかったんです」

来たくても来れなかった思いは本物なので、言葉に重みが増した気がした。その重み
で全身の疲れを自覚し、いそいそと例のバスタオルの上に横になった。マットレスなん
て気の利いたものはない、畳の上に直敷きのそれに。いや、畳だって日本のマットレス
だ。だからこれはマットレスに敷かれたタオルなんだ。たとえ畳が日に焼けてい草の
香りもなければ色だって黄色になり、しかもところどころ毛羽立ってしまったとしたと
ても。……いい加減畳替えをしろ。腕のいい畳屋を紹介するぞ。

「ソナノ？まあまあ。よく来たから今日は張り切っちゃおうヨ」

「お願い、じまあ!？」

だから、最後まで、言わせてくれ。今日はあんまり遮られないと思った矢先にこれだ。相変わらずのマスターっぷりだ。やめる落ち着け自分の精神。これこそマスターだ。なあって安心感を覚えるな。それは危険な兆候だ。

久しぶりののが作用しているのか、マスターがとても張り切っているのが作用しているのか。みしみしという音が続いたと思ったら、身体から鈍い音が響く。

なんだか、そういう楽器になったような気分になってきた。本日のバックミュージックが和太鼓演奏セレクションなのも相まって、重低音が実にそれっぽい。というかマスターは本当にどこから音源を調達しているんだ。まさか、どこかの路上やリヤカーで不法に販売されている、いわゆるドロポウ市のようなところから仕入れているんじゃないだろうな。公安案件ではないが、非常に気になる。年代物のラジカセと相まって違和感がない。

「ふんぬッ」

「…………ツ!!」

どうでもいいことをつらつらと考えていると、いままで聞いたことのないマスターのひつくい掛け声とともに背中と腰の間あたりに、かつてないほどの衝撃が加えられた。その衝撃が骨や筋を伝って全身に広がり、声も出ずに悶え、身体はいきなりのことを警戒するように強張った。

一瞬思考が空白に塗りつぶされた。これは、本当にやってしまったんじゃないか？ マスタルの技術は信頼しているが、あまりにも不穩。少しの空白を置いて戻ってくる体の感覚と、緊張状態からの解放で一気に血流が良くなるのがわかる。そして、なぜかあれほど強張っていたのに頭のとっぺんからつま先まで脱力した。もう指一本たりとも動かしたくないほどの解放感。なんだこれ、本当に動かない。いや、動かそうと思えば動く。動くんだが、動かしたくないと意志に反して体がごねる。

「ああ……」

「ソウネ、ソウヨネ、ソウナルヨネー！ マスタルの張り切り受けた奴、ミンナソーなるヨー！」
「これは……もう、だめです」

「安心しろロウドウーシャ、今すぐ陸上競技やれる体にしてやる。世界リクジヨもバツチシよ」

毎度思うけど安心できないからな。特に今日のは酷かったからな。それと、なんでいきなり陸上競技なんだ。そのうえさつき陸上つてちゃんと言えていた癖にそこで片言を入れるのか。誤魔化せよ。一度やったんなら持続させろ。なんでいつも適当すぎる片言演技なんだ。いま力が抜けているんだ、上手く笑えないのにやめてくれ。腹筋どころか背筋も引き攣る。死にかけの魚みたいな姿になる。

「ほくら、チカラ戻る。不思議なパワーで動けるようになる」

「う、ぐふっ、ごほっ」

笑い声を無理矢理飲み込んだせいで息が詰まった。いままで散々耐えてきたというのに、ついに敗北して咽てしまった。

不思議な力もなくでもないだろ。もしかしたら気功とかそういうことが言いたいのかもしれないが、マスタルのことだ。いちいち説明するのが面倒だから、不思議なインドパワーとでも思わせておけばいいとでも考えているに違いない。……これまで通い過ぎた弊害か、マスタルの思考の一部をトレース出来るようになってきた自分が恨めしい。

「インドパワーすごい? すごい?? スゴイヨネー!! あーっはっはっははははー!」

ほれみろ!! やっぱりそうだ!! 当たってもこれほど嬉しくない推理もないけどな!!

楽しい高笑いをあげながらも、マスタルの手が止まることはなく、身体はどんどん手入れをされて健康になっていった。

「おしまいだよ〜」

「……………」

色々精も根も尽き果て、動きにキレはないがやけにスムーズになった体を起こし、無言のまま財布から二千円を取り出す。増税しようがお値段そのまま。キャッシュレス決済なんてものは存在しない現金払い。雑な会計だが脱税はしておらず、きちんと納税

されているので文句はない。

そもそも一日にやってくる人数が少ない。当たり前前だけど、普通はこんな胡散臭いうえにオンボロなマッサージュ店に人は来ない。どこかクリニックを思わせるような清潔感や、癒しを感じるような少しだけ現実離れたインテリアで装飾する店に人は行く。腕はよかろうと、接客態度もこれだしな。

「うひひ」

たったの二千円を広げて口元を隠して、いかにもな笑い声をあげる店主。端金と言っている金額でよくもまあそんなに悪い顔が出来るものだ。それやる必要があるのか？ キヤラ付けなのか？ 似合い過ぎて思わず目を逸らした。直視していたら不思議なインパクトに魅了……じゃなかった、あやしい行動に突っ込みを入れたくなってしまいうから。

「そだ。オニーサン」

「なんででしょう？」

いつものように別れの挨拶をして扉を開けると、マスターが話しかけてきた。なんだ？ 水分補給ならこの後ちゃんとするから、久々のマスター節で疲弊した精神を休ませてくれ。体は万全と言っていていくらい癒えているが。

「明日ネー、鈴木のそだん役んとこでヨーガやるから、一緒にレッスンを受けるとイイヨ」

「……話が急すぎてついていけないんですが」

「みんなでヨーガやる。みーんな健康になる。そして平和」

「いえ、そうじゃなくなつて」

いきなり着いていつていいのかとか、そもそもこちらの都合をちゃんと考えているのか。でも。

「そのうちレッスン受けさせてくださいいね」

平和が一步でも進めたら。一步進んだのなら、また新たな不安要素に取り掛かるのが仕事で、きつと叶えられない約束だけど。

「ダイジョーブ、ダイジョーブ。カーリーと戦うより簡単！」

「戦神と戦う予定はありませんよ？」

こちらの返事に気をよくしたららしいマスターが、焼けた肌に似合いの白い歯を見せながら手を振つた。

平和はまだだけど、平穩になつたなら彼のところでヨガを習うのもいいかもしれない。きつとそれは、楽しくて笑い声が絶えなくて。平和の象徴みたいな時間なのだろう。それまでは、習わないで通わせてもらおうとしよう。

「それでは、また」